

in TI); Byôbu-iwa, in oppido Sôma-mura, Naka-tsugaru-gun (K. Hosoi, cult. Aomori, Jun. 14, 1970, TI); cataracta Anmonno-taki in Nishi-meya-mura, Naka-tsugaru-gun (H. Takaya, Jun. 28, 1970, TI).

This species has generally 5 styles, and unilocular capsules which have no septum at the base and are dehiscent in 5 valves at the apex, and belongs to the Melandrium group (probably *Silene* sect. *Gastrolychnis* (Fenzl) Chowdhuri).

* * * *

水島正美博士は不幸昨年 9 月に亡くなられたが遺稿を整理した中から一新種を公表する。水島博士は本種を確認するため 1969 年 6 月末わざわざその産地である青森県西津軽郡然(シカリ)岳の岩場に登られたが、これが博士の本格的採集旅行の最後になってしまった。

アオモリマンテマ (新種) 花柱は通常 5 本, 蒴果は完全な 1 室で先端は 5 裂するなどの性質から従来のフシグロ属に入るが, ピランジ属を広義にとってその一種として発表する。日本ではタカネマンテマ以外には近縁種のない非常に面白い植物である。概形はカラフトピランジなどにも似ているが別の群に属する。写真は屏風岩で笹森秀雄氏が撮影したものである。
(原 寛記)

○帰化植物ノート (3) (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: Miscellaneous notes on the naturalized flora of Japan (3)*

近年, 我国への外来雑草の侵入は, 全国的に益々増加の傾向を示している。そこで, 現在まで筆者の手もとに集りつつある資料のうち, 一応整理, 検定の終わったものを, 次に述べておきたい。

1) キバナヤセウツボ (新称)

ヤセウツボ *Orobanche minor* J.E. Smith in Sowerby & Smith, Engl. Bot. 6: 422, 1797 は, 地中海沿岸地方の原産であるが, 現在, ヨーロッパ各地はもとより, 広く北アメリカを始め, 世界各地に帰化している。本種は英名を Clover Broomrape と呼ばれるように, 主に *Trifolium* 属植物の根に寄生し, 一般にクローバー畑の雑草として知られている。一方, 我国では北村四郎博士によって, 本種の帰化が報告されて以来, 主に東京や千葉県下などを中心に生育が知られているが, 寄主は一概に *Trifolium* とは限らぬようである。

ところで最近 (1971 年 4 月 28 日), 千葉県柏市文化会館々長の斉藤吉永氏が, 同県下

* Continued from Sci. Rep. Yokosuka City Mus. No. 18: 15-17, 1971.



Fig. 1. *Orobanche minor* J.E. Smith var. *flava* Regel (=var. *lutea* Toulet) in Tateyama, Chiba Pref. (Photographed by Dr. S. Watari on May 2, 1972).

の館山市で全草が帯黄白色で、花冠も淡い黄色を呈する一品を発見され、筆者にその検定を求められた。当初、筆者は確かに母種と明らかに異ったものであることを認めたが、しかし最初に提示されたものが草丈も低く、貧弱な感じを与えるものであったため、例えば貧栄養などに伴う本種の単なる個体的な変異にすぎぬのではないか、との疑問を抱いた次第である。その後、同氏は筆者の要望に基づいて、さらに詳細に該地一帯を再度に亘り調査された結果、母種に混じて、あるいは単独にこの形のもの可成り多く生育しており、しかも植物体の大きさも、種々な程度のも存在する事実を明らかにされ、筆者の上述の疑問を氷解せしめられた (Fig. 1 参照)。そこで筆者は、同氏の調査データと、送付された多数の母種をも含めた標本 (1972 年 4 月 23 日採集) を、改めて詳細に検討した結果、この茎、花冠などが黄白色を帯びる一品を *Orobanche minor* J.E. Smith var. *flava* Regel (=var. *lutea* Toulet) に一

応あてておきたいと思う。なお和名は、最初、斉藤氏と共同で、シロバナヤセウツボなる名を用意したが、その後、同氏は現地における全体から受ける感じから、キバナヤセウツボの方がより適切なることを披歴されたので、これを用いることにしたい。

因みに、この変種は原産地においても、母種と共に分布しているらしく、従って我国でも本種の生育地を詳細に観察すれば、混じて生育している可能性がある。同学諸氏の注意を望みたい。

2) アレチアオゲイトウ (新称)

Amaranthus 属の植物は極めて種類も多く、現在までに 10 種近くのものが侵入、帰化しつつある実状にある。その中でも熱帯アメリカの原産で、現在、世界各地へ分

布しているホソアオゲイトウ (原, 1937) *A. patulus* Bertoloni は, 我国でも広く帰化, 生育し, 主に市街地周辺の雑草として, 極めて普通のものとなっている。一方, アオゲイトウ (松村任三教授のいわゆるアオビユ, 1895) *A. retroflexus* Linnaeus は, 古く明治末年に我国へ渡来, 帰化した, 現在では前者に比較して稀で, 主に山間部に点在, 生育 (本種は一般に北地を好む傾向がある) しているにすぎないようである。いずれにしても, この両者は, 我国における本属の代表的な帰化植物であることに間違いない。

ところで筆者は, 以前から前者に似て草丈もやや低く, 花穂も太めで, 後者との中間形を想わせるものが存在することに気付いていた。この点については, 既に久内清孝先生も本属の一般的な問題として触れておられるが, 筆者はこれを一応両者の雑種 *A. galii* Sennen et Gonzalo ex Priszter と認め, 上記の和名を命じ, 記録しておきたいと思う。

また最近, 各地で非常に繁殖を示しつつあるホナガイヌビユ *A. viridis* Linnaeus に似ているが, より大形で, 花穂の形状がホソアオゲイトウを想わせるものが稀に見出される。恐らく両者の雑種かとも考えられるが, これをイヌアオゲイトウと仮称し, 今後の研究にまきたい。

3) アレチムラサキ (セイヨウハマムラサキ) (新称)

前記の斉藤吉永氏が最近 (1972年7月), 千葉県下の袖ヶ浦海岸の埋立地でムラサキ科の一品を採集され, 筆者に検定を求められた。草丈 50 cm 内外の無毛の1年草 (原産地では多年草となる由) で, 株元より多数分岐し, やや横臥あるいは斜上し生育する。葉は線状広披針形 (後述のように本種の葉には, 種々の変化がある) で長さ 2~6 cm 許で, ほとんど無柄。分岐した枝先に通常2岐したさそり状の花穂を着ける。花は白色で, 文献によれば花期は5月から10月に亘るらしい。

これを筆者は, 熱帯アメリカ原産とされ, 現在, 北アメリカの主に太平洋岸にも広く分布, 生育している *Heliotropium curassavicum* Linnaeus, Sp. Pl. 130, 1753 と判定した。周知のように本属 *Heliotropium* の植物は, 温帯から熱帯にかけて約 200 種内外を産し, 我国でも園藝品として *H. corymbosum* Ruiz. et Pav. が栽培されているが, しかし本種は, まことに見えばえのしない全くの雑草である。ところで本種は, 英名 Seaside Heliotrope が示すように, 元来, 塩分を含む海岸附近の低地を好んで生育するらしく, 今回の採集地を筆者も斉藤氏の教示を得て訪れたが, 海岸の塩生砂地で, 原産地などの環境とも一致していた。今後, 我国の同様な地域に帰化し, いわゆる海岸植物フロラの一員に加わることであろう。

なお本種は, その広分布と相まって, 原産地などにおいても, かなりの変異 (変種として, 時には種の rank で) が知られているが, その中でも葉が広披針形状のものを var. *obovatum* A. De Candolle, Prodr. 9: 538, 1845—*H. spathulatum* Ryd-

berg, Bull. Torrey Club 30: 362, 1903 (ヒロハアレチムラサキ) として区別されている場合がある。今回のものも、その部位 (特に下部のもの) によっては、これに近い状態を示すものも認められ、細分して考える場合には、この範疇に入るかも知れない。しかし広く文献や外国標本などを参照し、比較した結果、種を大きくみて *H. curassavicum* Linn. に当てておくのが現在のところ妥当と考えるに至った (因みに、北アメリカなどでも、最近、種々の変種を区別せずに、全て本種に合一する傾向がある)。

なお、これに関連して外来品の種名を検定するに際しての、筆者の見解の一端を述べておきたい。すなわち、いわゆる種内変異や近似種を多く含み、従って彼地でも論議の多いものについては、既に外来品を我国で検定すること自体に無理があることを充分考慮に入れ、種を大きくみて検定した方が安全であると思っている。残念ながら、我国においては文献も、また比較すべき確実な標本も僅少で、しかも採集された個体数も、渡来 (侵入) 当初では極めて少なく、その変異の中なども詳細に知ることが出来ない。よって、このような条件下で、細かい点までを問題にしても、結局は後で混乱を来す恐れが十分に考えられる故である。

また本種の和名は、英名や生育環境に困んだハمامラサキなる名が適当と思われたが、しかし既に同名が存在する故、止むなく筆者が嘗つて神奈川県鶴沼で、マメアサガオやハナハコベなどと共に採集 (1952年5月) した本種の *sterile* の未検定標本上に仮称した、上掲の名をそのまま使用することとした。

4) ヒメハマアカザ (新称)

最近、筆者は我国に渡来している *Chenopodium* 属植物について検討を行っているが、その中で従来、シロザ (広義) *Ch. album* Linnaeus あるいはホソバノハマアカザの貧弱形として扱われて来たと思われる一種の存在に気付いたので、次に記録、紹介しておきたい。

本種は1年草で、Fig. 2 に示すように通常茎は単一直立して 20~60 cm 内外に達し、株元より多少分岐する。葉は披針形あるいは線状披針形を呈し、先端は尖り、全辺で長さ 2~4 cm 許、巾 2~4 mm 内外 (裏面に白粉を帯びることがある) で、1~3 脈を有し (この点については後述する)、短柄をもち、ほとんど無毛。5~9月にかけて、上部の葉腋に花梗を出し、多数の白色の粉状物を帯びた小花を塊状に密生してつける。これを筆者は、北米合衆国西部地方の原産で、海岸砂地や時には乾燥した荒地、あるいは湖畔の砂質地などに生育、分布し、最初カリフォルニア州より記載された *Chenopodium leptophyllum* Nuttall ex Moquin in De Candolle, Prodr. 13: (2): 71, 1849—S. Watson, Proc. Amer. Academ. 9: 94, 1874 と判定した。

この種は冒頭にも述べたように、我国でもいわゆるシロザ (本種については後報に詳述の予定である) と混同されていたと考えられるが、この点は彼地でも同様らしく、

古くはその変種 *Ch. album* Linnaeus var. *leptophyllum* Moquin, l. c. として取扱われていたらしい。

ところで本種は、元来、極めて多型なものらしく、種々の変種(または種の rank で)に分けられている。これらのいわゆる種内変異は、主として葉の主脈の数(1か3か)や葉裏の白色粉状物の有無、葉中の広狭および花穂の形状などに基づいて区別されている。すなわち本種の基本型 var. *leptophyllum* (ヒメハマアカザ)は、通常1主脈をもち、葉裏面に白色の粉状物を密布し、葉巾4 mm 以下のものである。また var. *subglabrum* S. Watson, Proc. Amer. Acad. 9: 95, 1874—*Ch. subglabrum* (S. Watson) A. Nelson, Bot. Gaz. 34: 362, 1902 (ホソバヒメハマアカザ)は、葉が1主脈をもち、裏面は白粉を密布せず、径1.5 mm 許の比較的大形の種子をもつ。さらに var. *oblongifolium* S. Watson, l. c.—*Ch. oblongifolium* Rydberg, Bull. Torrey Club 33: 137, 1906—*Ch. pratericola* Rydberg, Bull. Torrey Club 39: 310, 1912 (ヒロバヒメハマアカザ)は、葉が3主脈をもち、裏面に白色粉状物を密布し、葉巾4 mm 以上で、本種の中で最も大形のものとしてされている。

しかしながら、この分類に関しては、現在、彼地の専門家の間でも異論があって定説が認められぬ故、ここでは細分せずに全ての形を含め、一括して Narrow-leaved Goosefoot すなわち *Ch. leptophyllum* Nuttall として扱っておきたい。もし将来、本種が広く各地に帰化し、多くの個体を観察することが可能となれば、改めて詳細な検討を加えてみたいと考える。従って、現時点においては、これ以上の考察は前項において述べたのと同様な理由から、差控えることにしたい。因みに筆者は、本種を横浜、静岡県清水港附近および千葉県木更津などの海岸砂地などに散発的に生育しているのを実見しており、従って精査したならば、恐らく各地の海岸地帯に散在しているものと思われる。

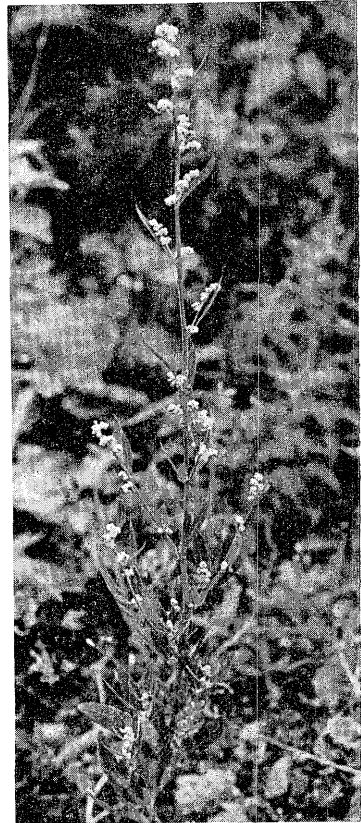


Fig. 2. *Chenopodium leptophyllum* Nuttall in waste sandy sites of Shimizu port, Shizuoka Pref. (Photographed by Y. Asai on Jun. 9, 1972).

5) ヒメブタナ (ケナシブタナ) (新称)

周知のようにヨーロッパ原産のブタナ *Hypochoeris radicata* Linnaeus は、昭和の初めに我国への侵入が記録された。そして現在、各地で帰化が報告されているが、未だ分布域は局在しているようである。

ところで太田久次氏は、三重県楠町で、これに近似の一品を採集 (1970年5月) されているので、ここに記録しておきたい。

本種は、ほとんど無毛の1年草あるいは2年草で、花茎は30 cm 許に達し、単一あるいは多少分岐する。葉は根出葉よりなり、披針形状で葉縁は羽状に浅一中裂するが、ブタナと同様に種々の程度があるらしい。花期は5~6月で、舌状花は黄色。

これは英名を Smooth cat's-ear と呼ばれている *Hypochoeris glabra* Linnaeus, Sp. Pl. 811, 1753 で、元来はヨーロッパの原産であるが、現在、北アメリカの主に太平洋岸などに帰化しているものである。要するに本種は、ブタナに似ているが、全草がより小形で、無毛の1年草 (ブタナは多年草) である点から、その区別は容易である。文献によれば、砂質地を好んで生育するらしく、今後、各地に帰化する可能性があるが、しかし既に混生しているかも知れない。同学諸氏の調査に期待したい。

最後に、筆者の調査、研究に対して、常に御理解ある御援助を賜っている東大の原寛名誉教授を始めとする関係者各位および亘理俊次博士、また興味ある資料を提供された斉藤吉永、太田久次両氏に対し、厚く御礼申上げたい。

Summary In the present paper, the author reported several alien weeds recently introduced to Japan.

1) *Orobancha minor* J. E. Smith var. *flava* Regel (=var. *lutea* Toulet) was discovered in sunny waste sites of Tateyama, Bôshô Peninsula, Chiba Prefecture on April 28, 1971, and was established in that locality.

2) *Amaranthus galii* Sennen et Gonzalo ex Priszter is naturalized in Japan.

3) A boraginaceous weed, *Heliotropium curassavicum* Linnaeus, native of tropical America, was found on sunny sandy soils of Nagaura, near Kisarazu city, Chiba Prefecture on July 16, 1972 as a casual alien.

4) A North American Goosefoot, *Chenopodium leptophyllum* Nuttall, was found sporadically in sandy beaches along the Pacific coast of central Honshû, i. e. Yokohama (Kanagawa Pref.), Shimizu (Shizuoka Pref.), and Kisarazu (Chiba Pref.).

5) An European weed, *Hypochoeris glabra* Linnaeus was collected in sunny waste place of Kusunoki-chô, Mie Prefecture on May 10, 1970.

(東京歯科大学歯科保存学教室)